

江戸蕎麦ものがたり  
江戸蕎麦 三大民話

江戸ソバリエ協会  
ほしひかる

☆尾張屋でお地蔵さんが、蕎麦手繰る<sup>たぐ</sup>

相模國小田原に誓願寺という浄土宗のお寺があります。

開基は北条武蔵守氏康の評定衆安藤良整。1563年のことといますから古いお寺です。ところが、ご存知のように関東の覇者だった小田原北条氏は、秀吉に滅ぼされ、関東の統治は家康が預かることになりました。

家康は江戸の都市づくりに小田原の城下町を参考にしました。つまり小田原城のように江戸城の周囲に寺院を配置しようというのです。しかし、ただ寺院を配置すればいいというものではありません。何か精神的支柱となるような人物がいなかったかと考えていたとき、誓願寺の東譽齡祖上人の評判が耳に入りました。家康は臣下の**大久保長安**に確かめるように指示します。

さっそく長安は小田原へ向かいました。ところが酒匂川<sup>さかかわ</sup>を渡ったときです。地中に石棒のような物が埋まっているのが見えました。部下に掘らせてみますと、右手にしゃくじょう錫杖、左手に如意宝珠を持った少年の背丈くらいの地蔵尊が現れ出しました。長安は、東譽上人に拝謁し、このことを話しましたところ、上人は「『延命地蔵経』に、地蔵尊は地より湧く」とある。まことに奇瑞なこと」と申されて開眼供養を施し誓願寺境内に安置され、家康の願いも聞き入れました。

こうして、誓願寺は1592年に本寺・末寺あげて、まず江戸・本銀町に来ました。例の地蔵尊の別当には西慶院の善誉俊也和尚が引き受けてくれました。そして4年後に神田小柳町(神田須田町1丁目)に、東西九十二間、南北百三十一間の敷地を賜ることになりました。このころ長安は石見守に任じられ、石見、佐渡、伊豆の金銀山の開発の驚異的な成果によって家康の側近の一翼を担うようになっていました。そのためでしょうか。長安と縁のある地蔵尊に縋りたい、肖りたいとの願いから長安の地蔵は「**勝軍地蔵**」と呼ばれるようになっていました。

しかしながら、江戸の街が経済で活気づいてきて、人口が増大してきますと、寺院の広大な敷地は人々の羨望の的になっていました。そうした折に起きたのが「明暦の大火」(1657年)です。江戸の大半が焼土となり、死者は10万人を越えました。ですのに、火元と噂された本郷丸山本妙寺はお咎めなしという謎の大火でした。

ともあれ、江戸は大都市として再開発されることになり、寺町は浅草、谷中、

本所、深川、三田などに計画されました。当然、誓願寺も浅草への引寺<sup>いんじ</sup>を命じられ、跡地は下総古河藩主土井大炊頭利重<sup>おおいのかみ</sup>の拝領屋敷になりました。

現在の「神田藪」と「神田まつや」のすぐ近くにありますが、誓願寺および土井家屋敷跡です。また当地はいまも土井家の敷地であると聞いています。

さて、浅草は発展していきませんが、そこへ新吉原が移転してきました。浅草は馬道、日本堤、山谷堀に茶屋ができて、街はさらに賑わうようになりました。そのころのことです。

浅草広小路(雷門通り)に「尾張屋」という蕎麦屋がありました。

蕎麦屋の店主は勝造、女房は小春といました。それに見習い職人が二人います。

それがある年の秋のこと、ある刻になりますと、決まって一人のお坊さまがお見えになって蕎麦を手繰られるようになりました。三日に一度はお見えになるのです。

「あ〜、美味しかった。ご馳走さまでした」。

お坊さまは丁寧に手を合わせてお礼を言うと、いつも余計なことはお話をささげず、暖簾を分けてお帰りになられるのです。

「上品なお顔ながら、威圧感のある身体つき。ただのお方じゃあるめえ、いったいどちらのお方だ」。

店主の勝造はだんだん気になってきました。

「あんた。そんなに気になるんだったら、跡でも付けてみなよ」。

女房の小春に背中を押された勝造は「そうしてみっか」と目立たないようにして跡を付けてみました。

お坊さまは広小路から北寺町に出て、そして誓願寺の大きな門に入るやそのまま境内を真っ直ぐ歩いて行って一番奥の西慶院の地蔵堂の所で一瞬後光のような煌めきがしますと、お姿が消えてしまいました。

勝造は、へたへたと坐り込み、しばし呆然としていました。どのくらい時間が過ぎたのか分かりませんが、勝造はやっと気を取り戻し、何とかして店に帰りつきました。店はもう閉めてありました。職人たちが後片付けや掃除をしています。小春の姿は見えませんでした。そのことに勝造は気づきません。そのまま部屋でぼうとしていましたが、いつの間にか寝入ってしまいました。すると、勝造の頭の中に厳かなお告げが響いてきました。

「われは西慶院の地蔵である。日ごろ、汝から蕎麦の供養を頂き、まことにかたじけない。その報いに、一家と店の諸難を退散し、とくに悪疫から守って遣わそう」。

勝造はびっくりして起き上がった所に、小春も戻ってきました。

「オ、オイ。何処へ行ってやがった。テーヘンダ！」

勝造は、お坊さまの正体が分かったこと、お告げがあったことを小春に話しました。

「お前さん、ありがたい話じゃござんせんか。これは…、お礼をしないと罰ばちが当たりゃしないかい」。

「罰か！」

「そうだよ。ねえ、明日から毎日、こちらからお蕎麦をお供えに行こうじゃないかい」。

翌日から尾張屋夫婦は西慶院へ出かけて行って、毎日お蕎麦を供え、お地蔵さまにお祈りを欠かさない毎日が始まりました。こうして毎朝お蕎麦をお供えして、目を閉じて神妙に頭を下げていますと、妙な気持になることに気が付きました。今日一日の心が新たに決まるような気がするのです。それで夫婦ともに商いに精を出すようになりました。

それから、月日が経った天保八年(1837年)の春から秋にかけてのことでした。江戸では伝染病が大流行し、死人が続出していました。世間は大変だというのは、「尾張屋」一家だけは何事もなかったのです。不思議なことでした。

それを訊かれた小春は「西慶院さまのお地蔵さまのお蔭だよ」と答えるのでした。人間は、縁起のいいことには肖ろうとするものです。何や彼やと聞きたがる客もふくめて「尾張屋」は門前市をなすほどにお客があふれるようになりました。こうして、誓願寺の「勝軍地蔵」は「蕎麦喰地蔵」と呼ばれるようになりました。

さて、この誓願寺ですが、1932年の関東大震災でまた移転することになりました。移転先は、諸般の事情によって、本院の誓願寺は府中へ、塔頭の十一ヶ寺は練馬でした。いえば親子が離れ離れになったのです。また蕎麦喰地蔵尊の別当である西慶院が閉院となりましたので、練馬では代わって九品院くほんが別当になりました。子寺は「練馬十一ヶ寺」と通称されるようになりました。

筆者も一度お詣りしたいと思って九品院をお訪ねし、ご住職さまにもお話をうかがいました。

それから数年経った2004年、当江戸ソバリエ協会が江戸ソバリエ・シンポジウムを開催している日でした。会場に、練馬の迎接院こうじょう18世藤木雅雄住職の夫人がお見えになりました。

迎接院はあの練馬十一ヶ寺の一つで入口の左側にある寺院です。それが何事だろうと思ってお会いしたら、九品院の前住職が亡くなられたので、いま迎接院ご住職が九品院32世住職を兼務されているとのこと。そうすると私が前にお会いした前住職様は31世だったことになりませんが、そのときの私の名刺があったからということから、訪ねて来られたようでした。

それからご住職と何度かお会いして、江戸ソバリエの仲間たちによって、蕎麦喰地蔵尊への蕎麦奉納をすることになりました。

奉納は平成17年10月1日から平成25年11月30日までの8年間に17回行い、いまは一旦終了させていただいています。理由は九品院が建替工事に入ったからです。蕎麦奉納では、今も浅草にある「尾張屋」の女将さんをお招きした



傳通院の当時の住職は「中興の祖」と言われる正誉廓山上人(1572~1625)でした。

この方は 3000 人の修行僧を連れて入山し、傳通院を壇林寺院と定められた大変な高僧でした。また壇林とは教学の根本道場のことです。学寮は傳通院の西

にあり、学寮長は極山ごくざんという実直な和尚でした。

それが 1618 年 4 月 7 日のことです。極山和尚の夢枕に立つ者がいました。

「余は澤蔵司という者じゃが、明日から浄土宗を学びたい」。

告げるように言うやその者はスーと消えました。

翌朝のことです。歳のころ 30 才ぐらいの僧が寺の門に立って、「われは澤蔵司という者、極山和尚を慕って泉州から参りました」と言うのです。

昨夜の夢といい、この僧の凡ならざる容貌といい、不思議なことがあるものだとして極山和尚は澤蔵司の入山を領諾しました。

果せるかな、澤蔵司は才識絶倫にしてわずか 3 年で一切浄土の奥義を究め、同僚からも一目おかれる存在になりました。

そうして 1620 年の 5 月 7 日のことでした。再び澤蔵司が学寮長の霊夢のなかに現れてこう述べました。

「余は、太田道灌が千代田城内に勧請した稻荷大明神である。かねてより浄土宗を学びたいと思うて、当山へ参った。今日、長年の望みを達したので元に戻るが、永く当山を守護して報いることにしたい」。

極山和尚は驚いて、廓山上人に報告しました。

上人は深く頷きながらこう申されます。

「拙僧らは仏縁によってこの世に生きておる。澤蔵司のことは吉祥、そして吉祥もまた縁。大切にしましょうぞ」。

こう申されると、廓山上人は境内に稻荷社を建てて澤蔵司が残した十一面観音像(高:40 cm)と澤蔵司尊像(高:50 cm)を祀って、慈眼院を別当と定めたのでした。

こうして先ず、伝説の澤蔵司稻荷が登場しました。

このころ、世間では《天麩羅蕎麦》が人気でした。

蕎麦屋の蕎麦は早い時期から店舗商いでしたが、天麩羅は屋台から始まりました。その時期については明確ではありませんが、おそらく安永年間(1772~81)だろうと言われています。そして蕎麦も店だけではなく、このころから屋台売りを始めたのでしょう。そこでよく言われていますのが、蕎麦の屋台と天麩羅の屋台が並んでいて、たまたま誰かが掛け蕎麦の上に天麩羅を載せたのが《天麩羅蕎麦》の起こりだろう、と。誕生話には他にも「たまたま」ということがありますから、おそらくそうかもしれません。

「狐と油揚げ」の組み合わせは昔から言われていましたが、「天麩羅」は「天=ア・麩=ブ・羅=ラ」のことだと言いますから、このころに「狐と天麩羅」という組み合わせになったのかもしれませんが。

時代は下って 18 世紀初頭になりました。傳通院は 17 世頭誉祐天上人(1637~1718)の代でしたが、この方は「狐の祐天」とも呼ばれていました。といひますの

は、上人の下総国飯沼の弘<sup>ぐぎょうじ</sup>経寺時代に、自分が体験した狐<sup>きつね</sup>憑き退治事件についてを弟子の残寿に書かせ、自らの霊力を宣伝していた(1690年刊『死霊解脱物語聞書』)からでした。

祐天が撒いたこの種は130年以上経って花が咲きました。それは4代目鶴屋南北が「祐天の狐落とし」を材にした『色彩<sup>いろもよう</sup>間<sup>ちよつと</sup>苳<sup>かりまめ</sup>豆』通称『罌<sup>かさね</sup>』が大当たりしたのです(初演1823年)。以来、江戸っ子は「狐落とし」という悪霊祓いを認識するようになりました。

ここで本格的に「狐」が登場したのです。

こうして澤蔵司稻荷+狐+天麩羅蕎麦の役者が揃いまして、いつのころからか、こんな話が江戸に流れるようになりました。

傳通院の門前に一軒の蕎麦屋がありました。店主は重助、女房はおヨウといいました。夫婦は仲良く毎日、蕎麦商いにいそしんでいましたが、ある日のことです。

一人の若いお坊さまがお顔を出され、《天麩羅蕎麦》を召し上がって帰られました。その夜のこと、店主の重助が売上の銭勘定をしますと、椋の葉が一枚入っているのです。重助は何かのはずみで紛れ込んだのだろうと気にもしませんでした。それからそのお坊さまは数日おきに見えるようになりましたが、決まって召し上がるのは《天麩羅蕎麦》でした。とくに天麩羅を口になされたときは、ほんとうに幸せそうな顔をなされるのです。そして不思議なことにお坊さまが見えたときは老若男女のお客で店は一杯になるのですが、重ねて不思議なのはお坊様が見えたときに椋の葉が一枚紛れ込んでいることでした。そこで重助は、ハッとしました。慈眼院には大きな椋の木が立っているのを知っていたからです。傳通院や慈眼院、また周囲の塔頭にはたくさんの僧侶がいらっしやいますから、重助が知らない人もおられます。いったいどなただろう。それになぜか椋の葉が気になります。重助はそのことを女房のおヨウに言って、ある日こっそり若いお坊さまの跡を付けました。お坊さまは傳通院の方へ歩いて行かれ、さらには右の坂を行かれます。そして慈眼院の門の中へ進まれ、さ

らに東の崖下の白狐の靈窟<sup>おあな</sup>に近づかれるとお坊さまは光につつまれて消えました。このとき重助は霊気を感じましたが、あるていど予感みたいなものがありましたので、落ち着いて「あのお方は、きっと澤蔵司さまにちがいない」と思っ

たのでした。それでも「こりゃ大変じゃ。澤蔵司さまと知っておれば、もっと旨<sup>うめ</sup>え《天麩羅蕎麦》を差し上げたのに、申し訳ねえ」と深々と靈窟に向かって頭を下げて店に戻りました。

翌日から、重助は「旨え《天麩羅蕎麦》を澤蔵司さまに」と呟きながら、一生懸命に作って、白狐の靈窟に毎日お届けしました。

そしてこのことは、江戸中に知られるようになりました。

ということで、1827年ごろに主題の川柳が詠まれたのではないのでしょうか。

時代はさらに経って現代になります。

いまも傳通院の門前に「萬盛」という蕎麦屋があります。店主は実直な方でした。毎朝、毎朝、澤蔵司稲荷にお蕎麦を供えてから、商いを始めておられました。伝説を自らの行動で守り続けられているのでした。

また筆者は、慈眼院のご住職さまとも親しくさせていただき、ここでも六代目三遊亭圓窓師匠に、澤蔵司の伝説を落語にして、ご口演していただいたこともありました(平成18年5月石垣解体工事竣工式にて)。

話によりますと、澤蔵司稲荷は今市の浄泉寺にも祀られているそうです。さらに驚いたことは江戸ソバリエの某氏宅(千代田区)にも澤蔵司稲荷が分祀されていたことです。筆者は「貴方こそ本物の江戸ソバリエだ」と申し上げたものです。加えて文学的には、森鷗外は祐天上人の六字名号(「南無阿弥陀仏」)を見たことから、小説『寿阿弥の手紙』を上梓しています。

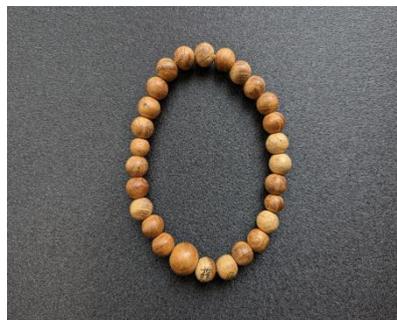
これらの逸話は澤蔵司稲荷の影響の大きさを物語るものだと思います。



[澤蔵司稲荷]



[蕎麦稲荷☆ほしひかる絵]



[棕の木で作ったお数珠]

## ☆<sup>むすめ</sup>あの娘、閻魔さまとはつゆ知らず

日光道中千住宿に氷川山金蔵寺があります。

この宿場には55軒の旅籠が並び、そのうちの36軒には飯盛女めしもりおんながいましたが、こうした女郎衆のことを船頭たちはこんな風に唄っていました。

一に中田屋、二に竹吾妻、三に相模でとどめさす、

千住女郎衆は錨もやいか、舳かか、上り下りの船停める♪（千住節）

風の強いある夕刻のことでした。蕎麦つゆの香りが風によって宿場町にある近くの金蔵寺まで届いていました。お寺に祀られていたのは厳つい顔をした閻魔さまでした。

閻魔さまは旨そうな蕎麦つゆの香りを毎日嗅いでいるうちに、匂いが鼻から離れません。

「あゝ、あの旨そうな汁、溜まらんな〜」。

とうとう我慢できなくなった閻魔さまは、日ごろからお詣りに来てくれる若い遊女の姿を借りて、こっそり焰魔堂を抜け出しました。若い娘に変身した閻魔さまの行先は決まっています。蕎麦つゆの香りに誘われ、真っ直ぐに蕎麦屋の「よろず屋」に付きました。閻魔さまは娘らしく腰を屈めて暖簾の中に入りました。「よろず屋」の店主は万吉、女房はおセツ、働き者の夫婦です。

娘は二十歳そこそこでしょうか。しかも一人です。反対側の小上がりこあに座っていた2人の客が誰か男でも入って来るのじゃないかと思って、チラチラと暖簾の方に目をやりますが、その気配はありません。

気遣った女房のおセツは男客の視線を遮るような位置に立って、「何にしましょうか」と声をかけました。

閻魔さま、いえ若い娘は小声で可愛らしく応じます。

「あもう、《かけ蕎麦》を……」。

おセツは奥の万吉に声を投げます。

「《かけ》一丁ちょう」。

「あいよつ、《かけ》一丁ちょ」

万吉は手際よく《かけ蕎麦》を作ります。

娘はなぜかそわそわしている様子です。おセツも何か気になります。

そうしているうちに万吉がおセツに向かって声を発します。

。

おセツは娘の元に運びます。

娘は目をキラキラさせて待ってましたとつゆを一口飲みます。

「あ〜、おつゆが美味しいわ」。

うっとりするような声におセツも悪い気はしません。

そこへ娘は脇に置いてある七色唐辛子を手に取って、《かけ蕎麦》に振り掛けました。

おセツと男客たちがエッ、エッ、エッと思っているうちに井の表面が真っ赤になってしまいました。

それでもかまわず娘は美味しそうに麺とつゆを口に入れるのです。

そうして食べ終わると「ふう」と息を吐いてから、箸を置いて手を合わせ「ごちそうさまでした」と言ってから、「女将さん、美味しゅうございました」と言いながら、チラッと視線を男客に向けて「それから女将さん、お気遣いありがとうございます」と丁寧<sup>ていねい</sup>に頭を下げ、帰って行ったのです。

おセツは感心しながら、「いったいあの娘は何処の娘なんだろう」と不思議に思いました。

ところで、閻魔さまは一度だけのつもりだったのですが、お蕎麦が大好きになってしまいました。またもやつゆの匂いが風に乗って漂ってきますと、居ても立ってもいられなくなり。またまた娘の姿になって出かけるのでした。当然、「よろず屋」に通う美しい娘のことは宿場中の評判になってしまい、「よろず屋」は客でいっぱいになるのでした。

二、三日経った夕方、金蔵寺の住職が閻魔堂の前を通りますと、何か違和感がありました。そこで堂内を覗いてみますと、何と蛻<sup>もぬけ</sup>の殻、閻魔さまのお姿がありません。

「こりゃ大変じゃ。開基開山以来、このような事は初めてじゃ。どうしたものか、どうしたものか」。と額をピタピタと叩きながらも案外平気な顔をしておられました。

一方「よろずや」は、娘は通って来る。さらにお客が「あの娘は何処の娘か、素人にしちゃ色っぽすぎる」と言えば、誰かは「何処かで見た顔だなあ」なんて言い出す者もいる。「エッ、何処だよ」。「確か、中田屋だあ」。「べらぼうめ、あんな敷居<sup>たけ</sup>の高え遊女屋がテメエなんか相手してくれるわけがねえ」。「フン、行ってみたかったから、言ってみただよっ」と、噂話を咲かせる具合です。その挙句、「亭主、お前さん、一回あの娘の跡を付けてみなよ」。「そうだ、そうだ」と押し切られ、とうとう万吉は、謎の娘の跡を付るはめになりました。

そうとは知らず娘さんは、街道を渡って裏道に入り、金蔵寺の閻魔堂の前で線香に点いた火のように一瞬で消えてしまい、辺りには微かな煙が漂っているのです。

「もしかしたら、あの方は閻魔さま。おいら、何か悪いこと、したのかい」。

万吉は身震いしました。

「死んだときおいらは、三途の川で堰止め、喰っちまうんじゃねえのかい。三図の川ってえのは、千住の大橋みてえな立派な橋が架っているわけじゃねえし。帆掛け船がいるわけじゃねえし、勘弁してくれよう」。

しょんぼりして店に戻った万吉を見て、女房のおセツが優しく声をかけます。

万吉は一部始終をおセツに話しますが、話しているうちに「閻魔さまにご足労いただくより、こっちからお運びするのはどうでえ」という考えがわいてきました。

おセツは「お前さんがそう思うならおやり、手伝うよ。喉に引っ掛かった小骨

は取らなきゃねえ」と笑顔で言います。この笑顔に、万吉はいつも助けられています。翌朝から万吉はたっぷり七色唐辛子をかけた《かけ蕎麦》を閻魔さまへ出前のようにお運びかるようになりました。

それから二ヶ月ほどしたころです。実は、万吉・おセツ夫婦には5才の子供がおりました。その子は喘息で苦しんでいます。親としては何とかしてやりたいと思うのですが、なかなか芳しくなく、不憫さと親の責任みたいなものを感じていました。ところが、おセツが「あんだ。近ごろ、あの子の咳がよさそうなんだよ」と言うのです。それから夫婦はもう一ヶ月様子を見ていましたら、子はほとんど咳をしません。万吉とおセツは手を取り合って喜びましたが、治療の心当たりはまったくありません。二人して話した結論は、閻魔さまへのお詣りのせいしか思い当たらないのです。

そんなわけで、二人はそろって閻魔さまのところへ参って、御礼を申しあげました。そこへご住職が顔を出され、「ご苦労さまじゃのう」と声をかけられました。夫婦は子供の喘息が治まったお礼を申しあげました。

「おお、さようか、さようか。万吉さんのお身内は息災で、お店も繁盛、よかったのう。実はわしものう、閻魔さまが落ち着いて座っておられるようなので安堵しているわけじゃ。それも万吉さんが運んでくれた、閻魔さまのお好きな七色唐辛子入りの《かけ蕎麦》のお蔭じゃろ。きっと満足されているにちがいないと思うての、万吉さんにお礼を申したいところじゃよ。よかった、よかった」と笑顔を振りまきながら、本堂の方へと戻られました。

過日、金蔵寺のご住職にお会いしてお話を伺いますと、当地の実力者だった永野長右エ門が、天保の大飢饉のときに亡くなった遊女たちの無縁塔を建ててくれたそうですが、その報恩談として、この話が生まれたとのことでした。



〔蕎麦閻魔☆ほしひかる絵〕

★以上の民話3題は、いずれも**家内安全**、**商売繁盛**という人々の現実的な願いが共通した主題になっています。この願いは現代でも変わりはないでしょう。

そしてもうひとつ、人々の願いには**恋愛成就**というのがありますが、それま

でこの民話に盛り込めば、分をわきまえよと神仏に咎められることでしょう。

それから、この民話はお寺と関わりがあるとはいえ、寺院で振る舞われる【寺方蕎麦】ではなく、あくまで蕎麦屋が商う【江戸蕎麦】の話であることをご承知おきください。

また、近辺には他に**医王寺(葛飾柴又)の蕎麦地藏ね尊**、**深大寺(調布市)のそば守観音様**、**栖雲寺(甲州市)の蕎麦<sup>とう</sup>観音様**などがお存し、筆者もお参りしたことも併せてご報告しておきます。

以上

《参考》誓願寺(小田原市)、九品院(練馬区)、弘経寺(常総市)、慈眼院(文京区小石川)、金蔵寺(足立区千住)ご住職のお話。

高田衛『江戸の悪霊祓い師』、森鷗外『寿阿弥の手紙』、『柳多留』、『諸国里人談』。青木玉「棕の木」(『小石川の家』)

《注》三大民話につきましては、民話を元にして筆者が脚色しています。